

間接的要求の使用に及ぼす『相手との親密度』と『要求の緊急性』

との交互作用について

1170402 大西 荘右将

高知工科大学マネジメント学部

1. 序論

あなたは誰かに何かを頼むときに、つい遠回しな表現を使ってしまった経験はないだろうか。例えば、相手に汚い部屋を掃除させたいとき、直接的に「掃除をしてください」と頼むのではなく、「足の踏み場もないですね」と感想を言うことで、部屋が汚れていることで自分が嫌な思いをしていることを相手に推論させて掃除をするように促すといった具合である。直接的な頼み方をすると相手との関係に角が立ちかねない場合でも、遠回しな表現を使うことでお互いに衝突を避けることが可能である。しかし、この遠回しな表現が機能するには頼まれる側が注意深く相手の真意について推論することが求められる。もし、この推論がなされていない場合、頼まれる側は頼む側の真意に気づくことないため、適切な意思疎通は行われないと考えられる。それではなぜ、人は自分の真意が相手に伝わりにくい遠回しな表現を使うのだろうか。この問題に対して現在までに様々な研究がなされている。それらの研究の中で有名なものに Brown and Levinson (1987) が提唱した、要求表現の使い分けに関する理論に『ポライトネス理論』が挙げられる。

1.1 要求表現の使い分けに関する理論

Brown and Levinson (1987) はポライトネス理論の中で、要求表現の使い分けについて2種類のフェイス(face)の概念を想定して説明している。以下では、Brown and Levinson (1987) のフェイスの定義と、2種類のフェイスについて記述する。

1.1.1 フェイスの概念と2種類のフェイス

福田 (2013) によると、『フェイスとは、すべての人間が自

分が持っている主張したいと思う公的自己イメージであり、以下の関係し合う二つの側面の中に存在する』『消極的フェイス：縄張りや私的領域や邪魔をされないことの権利などに対する基本的欲求。すなわち行動の自由や押しつけからの自由に対する要求である』『積極的フェイス：積極的で首尾一貫した自己イメージあるいは「人格」〈この自己イメージが評価され認められることへの欲求を必ず含む〉そしてそのイメージの存在が交渉相手からも支持されるもの』これらの定義について、福田(2013)は『消極的フェイスとは、「私的領域の保持」であり、積極的フェイスは「他者から自分の良いところを評価されたいという欲求」です。』と述べている (p.51 - 52)。つまり、Brown and Levinson の二つのフェイスは誰もが持つ基本的欲求であると言える。このことから、福田(2013)は欲求としての二つのフェイスは、時には相ぶつかり合うフェイス欲求で、たいていの場合、相補う形で私たちの心の中に存在している欲求であると考えている。一方で、Brown and Levinson (1987: 65) は『ある種の行為は、本質的にフェイスを侵害する』と述べている。

1.1.2 フェイス侵害行為(FTA)

フェイスの侵害行為は‘Face Threatening Act’と呼ばれ、FTA と略されている。FTA の種類や聞き手と話し手のどちらのフェイスが侵害されるのかについて、Brown and Levinson (1987) は記述している。その記述のなかで、重要な点として以下のように述べている。

『注意してほしいことは、フェイス侵害行為のこの分類には重複があるということである。なぜならフェイスの侵害行為のあるものは本質的に消極的フェイスと積極的フェイスの両方を脅かすものであるからである。〈例：公平、妨害、脅迫、

激しい感情表明、個人情報(の要求)』(Brown and Levinson (1987:67)、福田訳 (2013、p. 57 - 58))つまり、ここではほとんどの発話行為には潜在的に両方のフェイスを侵害する可能性がある」と述べている。これは、普段のコミュニケーション行動の中にも FTA の可能性が存在していることを意味している。この点について、福田(2013) は『FTA をそのままにするとフェイスとの摩擦が生じ、コミュニケーションがぎくしゃくしたり、相手も自分も傷つく可能性があります。』と述べている(p.62)。

1.1.3 FTA の程度とそれを引き起こす要因

では、実際のコミュニケーションの場面において要求表現の選択がどのようにして行われるのかについて、Brown and Levinson (1987) の理論を福田(2013) は以下のように説明している。『聞き手のフェイスに対する侵害度があまりに大きく、いかなる会話方略も無力だと予測される場合には、当該事項に関する発話自体を断念します。一方、FTA の度合いがそれほど高いものではなく、会話方略の工夫が可能だと判断すれば、とにかく当該事項についての発話を行うことを選択します。その次の段階では、発話に込められた発語内行為としての意図の明示・非明示によって、明示であればオンレコード発話が、非明示であればオフレコード発話が選ばれます。』(p.72 - 73) この記述の中でのオンレコード発話とは直接的要求表現のことを、オフレコード発話とは間接的要求表現のことをそれぞれ示していると考えられる。

ここで、Brown and Levinson が提案している FTA の度合いを測る公式を取り上げる。

$$W_x = D(S, H) + P(H, S) + R_x$$

(Brown and Levinson (1987: 76))

この式について福田(2013) は次のように説明している。『体面侵害行為の度合い (x) = (話し手と聞き手の間の親疎の距離 + (話し手に対する聞き手の)権力 + 発話内容としての事柄の重要度 (x) 。W = Weight, D = Distance, P = Power, S = Speaker, H = Hearer, R = Ranking, x = 変項。』(p.77 - 78) 文中の Ranking とは、会話の内容となっている事柄の軽重を意味している。この Ranking については文化圏の違いによって同じ事柄でもその問題度に差がみられる。このことは、福田(2013)でも、日本とアメリカを比較して自家用車の貸し借りや麺類の食べ方を例にして説明している。この説明から、

同じ事柄であっても文化ごとにその問題の重さに明らかな違いがあることが示されている。他の要因についても、文化ごとに微妙な差異が生じると考えられている。

1.2 要求表現の使い分けに関する先行研究

平川・深田・樋口 (2012) によると Brown and Levinson (1987) のポライトネス理論は、実証的な研究ではなかったため今日までに理論の妥当性を検討する様々な研究が行われていると説明されている。先行研究では、要求表現の使い分けを引き起こすと考えられる「社会的距離」「社会的地位」「要求量」の3要因の検討がなされている。この3要因の検討が進められていくなかで、「社会的地位」「要求量」の2要因については、多くの研究で社会的地位が高まるほど、また、要求量が大きいほど配慮を示す表現が使用されることが示されている (Holtgraves & Yang, 1990, 1992; Okamoto, 1991; 岡本, 2000; 戸嶋・皆川, 2008; 岡本, 1986, 2000)。しかし、「社会的距離」については、先行研究の結果が一貫していない。これについて、先行研究の結果とその結果が一貫しなかった原因を以下で整理する。

Holtgraves and Yang (1990, 1992) と岡本 (1986, 2000) では、ポライトネス理論の予測を支持する結果、つまり聞き手との関係が疎遠であるほど、配慮を示す程度の高い表現が使用されるという結果が得られている。しかしながら、Baxter (1984) では予測とは逆の結果が得られている。これらの研究結果の不一致は、社会的距離の適切性の問題と考えられている (Holtgraves, 2002, 2009)。Holtgraves and Yang (1990, 1992) や岡本 (1986, 2000) では、社会的距離の操作として親疎関係の操作を行っている。これに対して、Baxter (1984) では親密な他者が好意的な他者として、疎遠な他者が非好意的な他者として呈示されていたために、社会的距離と好意度が交絡してしまったと考えられる。これにより、Baxter (1984) の結果では、好意的な他者に対して非好意的な他者よりも配慮を示す表現を使用するという好意度の影響を強く受けたと考えられる。仮に、Holtgraves and Yang (1990, 1992) と岡本(1986, 2000) では好意度が交絡していなかったとすると、社会的距離が遠いほど配慮を示す程度が高くなるというポライトネス理論の予測通りの結果がえられたといえるだろう。

1.3 先行研究の問題点

要求表現の使い分けに及ぼす3要因の影響を検討した研究にはいくつか問題点が挙げられている。

その挙げられている問題点の中に、平川ら(2012)によって『要求表現の丁寧度 (politeness) と間接度 (indirectness) を明確に区別しないまま検定を行っている』(p. 16 - 17) ことが挙げられている。平川らは丁寧度をその表現が丁寧である度合いを指し、間接度をその表現が遠回しである度合いを指すと説明している。そのうえで、配慮を示す程度を反映する次元として、丁寧度と間接度の2次元が従来指摘されてきた (Leech, 1983) が、先行研究においては両次元を明確に区別した検討を行っていないと説明している。また、その理由として Brown and Levinson (1987) や Leech (1983) によってこの2次元がほぼ同一の概念として捉え、間接度が高まると意図の緩和がなされるために丁寧度が高まると主張していることを挙げている。これらのことから、先行研究においても丁寧度と間接度の間に正の直線関係があるという見解で、研究が行われている。

しかしながら、平川ら (2012) は『両次元間における正の直線関係の想定は、あくまで Leech (1983) や Brown and Levinson (1987) の思弁的論拠を根拠としたものであり、この想定に反する研究結果も得られている (Kulka, 1987; Dillard, Wilson, Tusing, & Kinney, 1997; Holtgraves & Yang, 1990; Kemper & Thissen, 1981)。』(p. 16 - 17) と説明している。これらの一部を例に挙げると、Dillard et al. (1997) は、丁寧度と直接度 (directness or explicitness) の間に有意な正の相関関係を見出している。間接度は直接度の対立概念であるため、Dillard et al (1997) の結果から、丁寧度と間接度に負の相関関係が存在することが示されている。これらの研究結果から、丁寧度と間接度に正の直線関係があることを仮定して検討を行うこと、両者を同一概念として扱うことは研究を行う上で重大な誤解を引き起こしてしまう可能性があるといえるだろう。

上記の問題について、平川ら (2012) によって要求表現の丁寧度および間接度の測定と、両者の関係の検討がなされている。これにより、表現の丁寧度と間接度の相関が $r = -.52$ ($p < .001$) であり、丁寧度と間接度が負の相関関係にあることが示された。この結果は、Dillard et al. (1997) の知見と

一致しており、平川ら (2012) は丁寧度と間接度を同一概念として扱うことの問題性を示していると判断している。

1.4 要求表現の使い分けに影響を与える新たな状況要因

これまでの研究では、状況要因として Brown & Levinson (1987) により「社会的距離」、「地位」、「コスト」の3要因が検討されてきた。しかし、平川・森永 (2013) は対人コミュニケーションの規定因として状況要因を軽視できないと捉え、新たな要因について検討している。この検討は、Cody & McLaughlin (1980) が抽出した6要因(「親密度」、「地位」、「反発可能性」、「正当性」、「重要性」、「2者関係への悪影響」)に、「要求が相手にかかるコスト」の要因を加えた7つの要因を基に考えられている。この研究で平川ら (2013) は7つの状況要因を網羅的に取り上げ、間接的要求の使用に対して主効果として影響する要因を特定し、その後交互作用を含めた状況要因の影響過程を考慮した検討をおこなっている。この検討の結果は以下のとおりである。直接的要求においては、7つの状況要因すべてで主効果が見られた。一方で間接的要求においては、主効果が見られたのが「地位」、「反発可能性」、「コスト」の3要因であった。このことから、平川ら (2013) は「要求の正当性」、「2者関係への悪影響」、「要求の重要性」の3要因は、間接的要求に影響しないことが示されたと述べている。

平川ら(2013)の研究で「要求の重要性」の要因の効果が見られなかった理由として、被験者が実験者の意図を正確に把握できていなかった可能性が考えられる。平川ら (2013) では、「頼みごとが、自分にとってかなり重要なとき」「(略) やや重要なとき」「(略) ほとんど重要でないとき」という文言で重要性を操作している。こうした表現では被験者ごとに何がどう重要なのか、解釈に曖昧さが存在してしまうことで、適切に重要性を操作できていなかった可能性が考えられるだろう。そこで、本研究では「要求の重要性」を「要求の緊急性」で操作することとした。具体的には、「要求が今達成されないと自分が重大な被害を受ける状況」を緊急性が高いと設定し、「要求が今達成されなくてもそれほど被害を受けない状況」を緊急性が低いと設定した。これにより、「要求の緊急性」を操作することで、緊急性が低い場合には緊急性が高い場合と比較してより間接的な要求表現を使用する可能性が高まる

と予測される。

また、「相手との親密度」と「要求の緊急性」の交互作用効果、すなわち、「相手との親密度」が低い場合では高い場合と比較して要求の緊急性の効果が大きくみられるとの予測も検証する。親しい人に対しては緊急性の高い低いに関係なく直接的に頼むため、「要求の緊急性」の効果はほとんどみられないだろう。しかし、親しくない人に対しては緊急性が低い場合では遠回しな頼み方を使用し、緊急性が高い場合では直接的な頼み方をするため、「要求の緊急性」の効果が大きくみられると考えられる。

2. 仮説

これまで、間接的要求を引き起こす要因として様々な要因が示されてきた。しかし、「社会的距離」の要因についてはその操作が適切に行われなかった可能性があった。そこで、本研究では「社会的距離」を「相手との親密度」で操作し、先行研究で理論の予測通りの結果が得られるか検証する。「相手との親密度」は継続的に相互作用が得られる可能性の高さと定義した。

また、先行研究では間接的要求に影響を与えないと示された「要求の重要性」の状況要因について、それによく似た要因として「要求の緊急性」を新たな状況要因として操作し、親密度と交互作用が見られるか検討する。

仮説1：親密度が高い相手よりも低い相手に対してより間接的要求を使用するだろう。

仮説2：要求の緊急性が高い場合よりも低い場合に、より間接的要求を使用するだろう。

仮説3：親密度が高い相手よりも低い相手の場合に、より緊急性の効果が大きく見られるだろう（親密度と緊急性の交互作用効果）。

これらの仮説を検証するため、質問紙を作成し、実験を実施した。

3. 方法

3.1 調査期間

2016年10月に実施し、質問紙配布対象者は、大学生116名(男性56名、女性60名)であった。参加者は実験室に集ま

り、数十分ほどの質問用紙に回答し、報酬を受け取り退室した。調査は3日間に分けて行った。

3.2 実験デザイン

実験では、要求の緊急性と親密度の条件をそれぞれ参加者内で配置した。具体的には、「緊急性が高い×親密度が高い」、「緊急性が低い×親密度が高い」、「緊急性が高い×親密度が低い」、「緊急性が低い×親密度が低い」の4条件を設定した。参加者はすべての条件を1度ずつ回答したが、初めに回答する条件は参加者によってランダムに配置した。従属変数は、間接度の異なる3つの要求表現それぞれへの頼む程度であった。

3.3 質問紙の内容

実験では以下のシナリオを実験参加者に読ませた。このシナリオは条件に関わらず、同一の内容であった。

あなたは大学4年生でアパートに一人暮らしをしています。今は3月末、就職のため他県に引っ越すところです。あなたは引っ越しの荷物を部屋からトラックに運んでいます。最後の荷物を運ぼうとしましたが、あまりに大きな荷物のため一人では運べません。

このシナリオを全員が読んだ上で、要求の緊急性の操作と相手との親密度の状況説明を加えた。

要求の緊急性は部屋を明け渡すまでの時間で操作した。具体的には、緊急性が高い条件では、「すでに部屋を明け渡す時刻が過ぎてしまっているため、すぐにも荷物を運んで出発しなければなりません。」と説明した。緊急性が低い条件では、「あと30分で部屋を明け渡す時刻になってしまいます。」と説明した。

次に、相手との親密度については「親密度が高い(親しい男性)」条件と「親密度が低い(知り合いの男性)」条件の2つを用意した。

それぞれの条件の詳細な説明は以下の通りである。

「親密度が高い(親しい男性)」条件では「この男性はあなたが大学時代によく同じ講義と一緒に受けていて、何度か一緒に飲み会にも行っている、仲の良い友人です。」と説明した。

「親密度が低い(知り合いの男性)」条件では「この男性はあなたと同じ大学の学生で、同じアパートに住んでいます。お互いに顔は見たことがありますが、たまに挨拶をするくらいで話をしたことはほとんどありません。」と説明した。

以上の状況の説明を読んだあと、参加者は上記の人物に対してどのように思うかを回答した。

具体的には、「今、あなたはこの男性に荷物運びを手伝ってもらおうかどうか、考えています。もし、荷物運びをお願いするとしたら、どのような言葉で頼みますか？以下のそれぞれの頼み方について、あなたが「そう頼みそうだ」と思う程度はどのくらいですか？あてはまる数字にそれぞれ○をつけてお答えください。」と教示した。その上で、「荷物を運ぶのを手伝ってくれると嬉しいなあ」、「荷物を運ぶのを手伝ってほしいなあ」、「荷物を運ぶのを手伝ってもらえないかなあ」のそれぞれの頼み方について、「1：絶対こう頼まないだろう」から「7：必ずこう頼むだろう」までの7件法で回答させた。

すべてのシナリオについて回答した後、それぞれの頼み方の間接度と丁寧度について「1：とても失礼」から「7：とても丁寧」、「1：とても直接的」から「とても間接的」までの7件法で回答させた。

4. 結果

すべてのデータはHADを用いて統計分析を行った(清水, 2016)。

4.1 要求表現の間接度の確認

上記の質問用紙の作成にあたって、平川ら(2012)で用いられた15種類の要求表現の中から、丁寧度の値が等しく、間接度の値が異なる3つの要求表現を使用した。

本研究の仮説を検証する前に、使用した3つの要求表現の丁寧度と間接度が平川ら(2012)と同様のパターンになるのか検証した(表1)。

	丁寧度	間接度
1. 荷物を運ぶのを手伝ってくれるとうれしいなあ	3.10(0.14)	5.66(0.14)
2. 荷物を運ぶのを手伝ってくれない？	4.29(0.14)	1.87(0.11)
3. 荷物を運ぶのを手伝ってもらえないかなあ	4.43(0.13)	3.52(0.15)

丁寧度の評定値を従属変数、頼み方の違いを独立変数とした一要因三水準被験者内配置の分散分析の結果(図1)、頼み方の違いの効果は有意であった($F(1, 115) = 31.750, p < .05, \eta^2 = .21$)。多重比較の結果、選択肢1 - 2間の差は有意であった($t(115) = -5.706, p < .05$)。選択肢1 - 3間の差は有意であった($t(115) = -8.949, p < .05$)。選択肢2 - 3

間の差は有意ではなかった($t(115) = -0.735, n. s.$)。

間接度の評定値を従属変数、頼み方の違いを独立変数とした一要因三水準被験者内配置の分散分析の結果(図2)、頼み方の違いの効果は有意であった($F(1, 115) = 177.254, p < .05, \eta^2 = .60$)。多重比較の結果、選択肢1 - 2間の差は有意であった($t(115) = 17.448, p < .05$)。選択肢1 - 3間の差は有意であった($t(115) = 10.308, p < .05$)。選択肢2 - 3間の差は有意であった($t(115) = -9.230, p < .05$)。

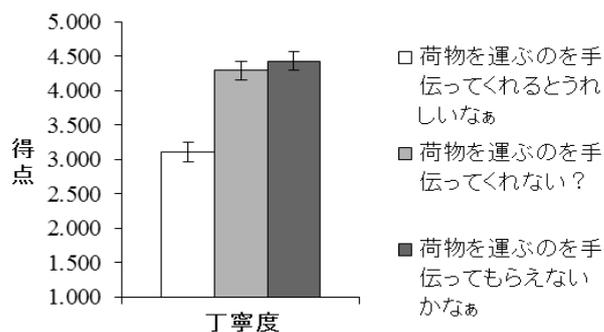


図1：頼み方の丁寧度

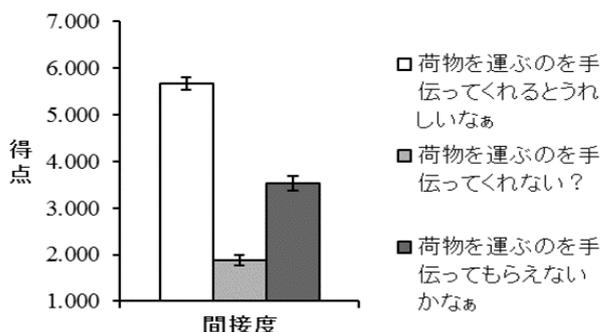


図2：頼み方の間接度

これらの結果は、間接度については平川ら(2012)の知見と同様のパターンを示したが、丁寧度については平川ら(2012)と異なり、1番目の頼み方がほかの頼み方よりも丁寧ではないと判断されていたことを示している。

丁寧度に関する差は見られたが、以下では『荷物を運ぶのを手伝ってくれるとうれしいなあ』を間接度の最も高い頼み方、『荷物を運ぶのを手伝ってくれない？』を間接度の最も低い頼み方、『荷物を運ぶのを手伝ってもらえないかなあ』を間接度の中間の頼み方として分析することとした。

4.2 仮説検証

間接度の異なる3つの要求表現それぞれへの頼む程度を従属変数、要求の緊急性と相手との親密度を独立変数とした、

2 要因分散分析 (参加者内) を行った。

間接度の最も高い頼み方 (「荷物を運ぶのを手伝ってくれると嬉しいなあ」) を頼むと思う程度の平均値を図 3 に示す。このときの頼む程度を従属変数とした分散分析の結果、相手の親密度の主効果が有意であった ($F(1, 115) = 56.765, p < .05, \eta^2 = .33$)。要求の緊急性の主効果は有意ではなかった ($F(1, 115) = 3.909, p = .05, \eta^2 = .03$)。交互作用効果は有意ではなかった ($F(1, 115) = 0.786, n.s., \eta^2 = .00$)。

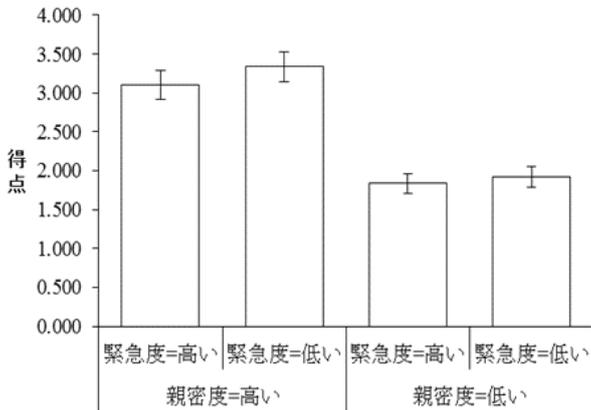


図 3: 間接度の最も高い頼み方を頼むと思う程度の平均値

間接度の最も低い頼み方 (「荷物を運ぶのを手伝ってくれないかなあ」) を頼むと思う程度の平均値を図 4 に示す。この頼む程度を従属変数とした分散分析の結果、相手の親密度の主効果が有意であった ($F(1, 115) = 97.921, p < .05, \eta^2 = .46$)。要求の緊急性の主効果が有意であった ($F(1, 115) = 4.262, p < .05, \eta^2 = .03$)。要求の緊急性の主効果を明示するため、緊急性の水準ごとの平均値について図 5 に示す。親密度と緊急性の交互作用効果は有意ではなかった ($F(1, 115) = 0.721, n.s., \eta^2 = .00$)。

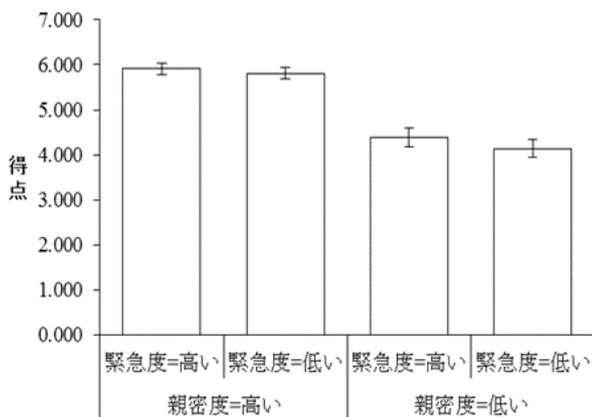


図 4: 間接度の最も低い頼み方を頼むと思う程度の平均値

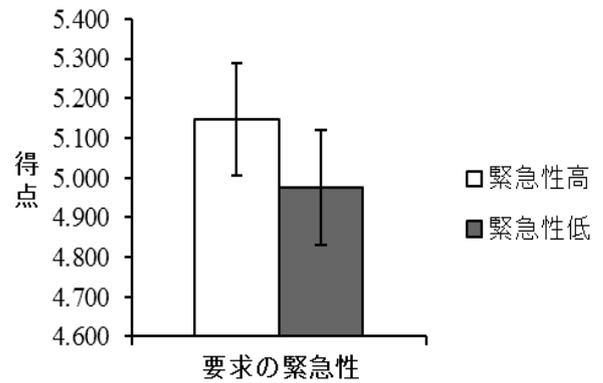


図 5: 要求の緊急性の水準ごとの平均値

間接度の中間の頼み方 (「荷物を運ぶのを手伝ってもらえないかなあ」) を頼むと思う程度の平均値を図 6 に示す。このときの頼む程度を従属変数とした分散分析の結果、相手の親密度の主効果が有意であった ($F(1, 115) = 17.919, p < .05, \eta^2 = .13$)。要求の緊急性の主効果は有意ではなかった ($F(1, 115) = 1.507, n.s., \eta^2 = .01$)。交互作用効果が有意であった ($F(1, 115) = 8.892, p < .05, \eta^2 = .07$)。単純主効果検定の結果、緊急性が高いとき、親密度の効果は有意ではなかった ($F(1, 115) = .086, n.s., \eta^2 = .00$)。緊急性が低いとき、親密度の効果は有意であった ($F(1, 115) = 9.081, p < .05, \eta^2 = .14$)。

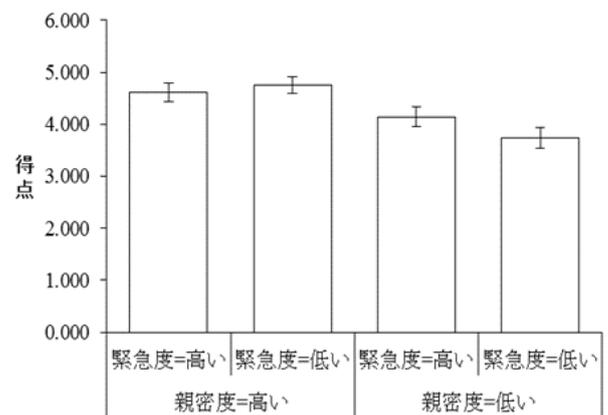


図 6: 間接度の中間の頼み方を頼むと思う程度の平均値

間接度の中間の頼み方でのみ見られた交互作用効果が、直接的な頼み方を頼む程度をコントロールしても生じてくるかどうかを検証するため、間接度の最も低い頼み方から中間の頼み方を引いた値を従属変数とした同様の分散分析を行った

(図7)。その結果、相手との親密度の主効果が有意であった ($F(1, 115) = 14.925, p < .05, \eta^2 = .11$)。要求の緊急性の主効果は有意ではなかった ($F(1, 115) = .122, n. s., \eta^2 = .00$)。交互作用効果は有意ではなかった ($F(1, 115) = 2.966, n. s., \eta^2 = .02$)。

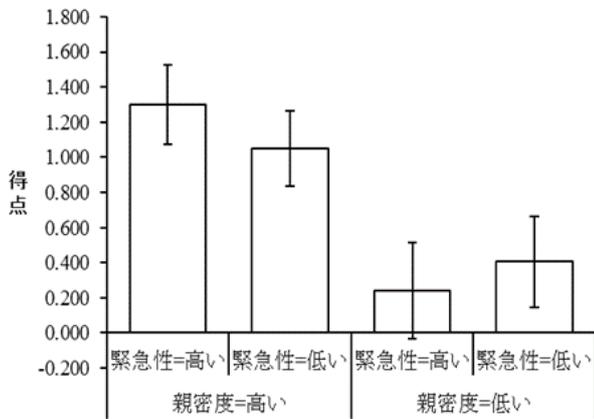


図7：間接度(最も低い - 中間)の頼み方を頼むと思う程度の平均値

5. 考察

5.1 結果のまとめ

考察に入る前に本研究の結果を以下にまとめる。

仮説1の「親密度が高い相手よりも低い相手に対してより間接的要求を使用するだろう」は間接的要求における親密度の主効果を予測する仮説である。実験の結果、いずれの頼み方についても、親密度の主効果は一貫して示された。このことは、間接的要求だけでなく、直接的な要求においても親密度の効果が見られることを意味している。従って、仮説1が支持されたとは言えないだろう。

仮説2の「要求の緊急性が高い場合よりも低い場合に、より間接的要求を使用するだろう」は間接的要求における緊急性の主効果を予測する仮説である。間接度の最も低い頼み方でのみ緊急性の主効果は示された。このことは、直接的な要求においてのみ緊急性の効果が見られることを意味している。これは、緊急性が高いほど直接的な要求表現を使用しやすいと捉えることができるため、仮説2は支持されなかった。

仮説3の「親密度が高い相手よりも低い相手の場合に、より緊急性の効果が大きく見られるだろう」は親密度と緊急性の交互作用効果を予測する仮説である。実験の結果、間接度

の中間の頼み方でのみ親密度と緊急性の交互作用が示された。この交互作用効果が、直接的な頼み方をコントロールしても生じてくるか検証した結果、交互作用効果は有意ではなかった。仮説では親密度が低い場合に、緊急性が高いと緊急性が低い場合よりもより直接的に頼むと予測していたが、平均値のパターンは予測したパターンとも一貫していなかった。

5.2 考察

仮説1が支持されなかった理由として、仮説自体が誤りであったことが考えられる。ポライトネス理論では聞き手との関係が疎遠であるほど、配慮を示す程度の高い表現が使用されるという予測がなされていたが、本研究の結果から相手との親密度が高い場合には、直接的にも間接的にも要求することが示された。このことから、要求表現の丁寧度と間接度を明確に分け、丁寧度を一定にし、間接度のみを操作した場合は、「相手との親密度」の要因は間接度と関連を示さないと考えられる。平川(2012)は既に『社会的距離、社会的地位、要求量は使用される表現の丁寧度に影響を及ぼし、間接度には影響を及ぼさないことが示された』という知見を示しているが、本研究の結果は彼の知見と一貫するものだと言える。したがって、要求表現の使い分けに影響を与える要因のひとつとしてポライトネス理論に挙げられている「社会的距離」は妥当性が低いと判断できるだろう。

仮説2が支持されなかった理由として、要求の緊急性と間接的要求との間に関係性がみられるだろうという仮説の前提が誤りであったことが考えられる。実際には、要求の緊急性が頼むという行動を促進するのは間接的要求ではなく、直接的な要求の場合であった。このことは、平川ら(2013)で示された「要求の重要性」の要因が間接的要求の使用に影響を及ぼさず、直接的な要求を促進するという実験結果を再現する知見が得られたと判断できる。したがって、要求表現の使い分けにおいて要求の緊急性は「要求の重要性」と同じく間接的な要求表現には関与しないが直接的な要求表現には影響を与えられとされる。

仮説3が支持されなかった理由として、親密度が低い相手に対しては高い相手よりも緊急性の効果を多く受けるだろうという仮説に誤りがあったことが考えられる。実際には親密度が高い相手と低い相手とを比較しても緊急性の与える影響にそれほど差はみられなかった。また、親密度が低い相手に

対しては緊急性が高い場合には低い場合と比べてより直接的な要求表現を使用するだろうと予測していたが、結果では逆の結果が得られた。このことから、親密度が低い相手に対しては緊急性が高い場合と比べて低い場合により直接的な要求表現を使用するだろうと判断できる。

6. 今後の課題

本研究では、それぞれの状況における相手への頼み方として3つの選択肢を用意していたが、その選択肢の中に「相手に頼まない」という選択肢を設けなかった。これは、本研究では直接的要求ないしは間接的要求がどの要因に影響を受け使用されるか検証するためであった。しかし、Brown and Levinson (1987) の記述には要求表現の使い分けに関して、間接的表現ないしは直接的表現を選択する前に聞き手のFTAがあまりにも高く、いかなる会話方略も無力だと予測される場合には、発話自体を断念する可能性も示唆されている。このことから、新たに選択肢として「頼むのをあきらめる」を設けて、話し手のこの選択肢を選ぶと思う度合いを検証することで日常生活の場面における要求表現の使い分けについてより理解が深まると考えられる。もし、親密度の違いによって、要求をあきらめる度合いが変化するのであれば、FTAの程度が「話し手と聞き手の親疎の距離」に大きく影響を受けていることが判断できる。この場合、日本人にとって他人に何かを頼むという行為自体に積極的ではないと考えられる。したがって、日本人の要求表現の使い分けを研究する上で、Brown and Levinson (1987) が提案しているFTAの度合いを測る公式を再度検証する必要があると考えられる。

また、本研究では被験者を20代の大学生を対象に実施しているため、他の世代で本研究と同じ結果が得られる保証はないと考えられる。このことから、世代別で要求表現の使い分けを検証することで、世代における要求表現の使い分けの移り変わりがみられるのではないかと考えられる。

引用文献

- Baxter, L.A. (1984). An investigation of compliance gaining as politeness. *Human Communication Research*, 10, 427-456.
- Blum-Kulka, S. (1987). Indirectness and politeness in requests: Same or different? *Journal of Pragmatics*, 11, 131-146.
- Brown, P., & Levinson, S. (1987). *Politeness: Some universals in language usage*. New York: Cambridge University Press
- Dillard, J. P., Wilson, S. R., Tusing, K. J., & Kinney, T. A. (1997). Politeness judgments in personal relationships. *Journal of Language and Social Psychology*, 16, 297-325.
- Goffman, E. (1967). *Interaction ritual: Essays on face-to-face interaction*. Oxford, England: Aldine.
- Holtgraves, T. (2002). *Language as social action: Social psychology and language use*. Mahwah, NJ: Lawrence Erlbaum Associates.
- Holtgraves, T. (2009). Face, politeness and interpersonal variables: Implications for language production and comprehension. In F. Bargiela-Chiappini, & M. Haugh (Eds.), *Face, communication and social interaction*. London: Equinox. Pp. 192-224.
- Holtgraves, T., & Yang, J.-N. (1990). Politeness as universal: Cross-cultural perceptions of request strategies and inferences based on their use. *Journal of Personality and Social Psychology*, 59, 719-729.
- Holtgraves, T., & Yang, J.-N. (1992). Interpersonal under-pinnings of request strategies: General principles and differences due to culture and gender. *Journal of Personality and Social Psychology*, 62, 246-256.
- Kemper, S., & Thissen, D. (1981). Memory for the dimensions of requests. *Journal of Verbal Learning and Verbal Behavior*, 20, 552-563.
- Leech, G. N. (1983). *Principles of pragmatics*. London: Longman.
- Okamoto, S. (1991). Expressions of request in the Japanese language Requesters' considerations for requestees' costs. *Japanese Journal of Experimental Social Psychology*, 31, 211-221.
- 岡本真一郎 (1986). 信頼の言語的スタイル 実験社会心理学研究, 26, 47-56.
- 岡本真一郎 (1991). 要求発話における“事情表現”の規定因

- 心理学研究, 62, 164-171.
- 岡本真一郎 (2000). 言語表現の状況的使い分けに関する社会心理学的研究 風間書房
- 清水裕士 (2016). フリーの統計分析ソフトHAD: 機能の紹介と統計学習・教育, 研究実践における利用方法の提案
メディア・情報・コミュニケーション研究, 1, 59-73.
- 戸嶋祐介・皆川直凡 (2008). 依頼コストと依頼の相手による依頼表現の変動 軽量国語学, 26, 158-164.
- 平川真・深田博己・樋口匡貴 (2012). 要求表現の使い分けの規定因とその影響過程: ポライトネス理論に基づく検討
実験社会心理学研究, 15-24.
- 平川真・森永康子 (2013). 間接的要求の使用に及ぼす状況要因の影響 対人コミュニケーション研究, 39-53.
- 福田 一雄 (2013). 対人関係の言語学 ポライトネスからの眺め (第1版), 39-71, 開拓社.